会計の歴史

歴史は繰り返すと言われます
困ったことに直面した時、歴史を振り返ると、以前にも同じような事態が生起し、歴史がその解決法を教えてくれるのではないか、という期待です
これが歴史研究のひとつの目的かもしれません
確かにその一面はあります
18 世紀前半のイギリスで生じた株式への投機バブルとその結果生じた南海泡沫事件は、1980 年代後半から始まる日本のバブル景気と、その後の顛末を彷彿とさせます
ですが、当時のイギリス政府や企業がとった対処法をそのまま活用すれば、既に解決できたかという言えば、話はそう簡単ではありません
だからこそ失われた 20 年になったのです
当時イギリスの状況と 20 世紀の日本ではあらゆる点で大きな違いがあります
その時の対処法が現代でもそのまま有効な治療法になるとは限りません
では、歴史を振り返る意味はどこにあるのでしょうか
全く役に立たないと言うのででしょうか
もちろん、そんなことはありません
もし、過去に同じような事態が生じていれば当時の人たちがどのような対処法で乗り越えていったのかを分析すれば、そこには必ず解決の糸口が潜んでいるに違いありません
歴史はいつも時空を超えた共通の何かを私たちに提供してくれます
「それが何か」は、受け止める時代や社会や人によって変わってくるのかもしれません
その選択肢如何によって成功裡に終わる場合と、そうでない場合が生じます
歴史研究の面白さであり、また怖さでもあります
怖さはある日突然襲ってきます
新しい史料の分析によって、新しい技術が発見されたと感じた時の喜びは、まさに天にも昇る思いです
しかし、自信を持って問いかけたはずの新たな解釈が、実は単なる思い込みや誤解に過ぎなかったということにしばしば遭遇します
歴史研究者なら誰しも、しかも幾度となく経験してきたことでしょう
日常生活でも同じようなことに出くわすことがあるのではないでしょうか
今度こそ新しい史料による分析なので、これまでにない新しい技術にたどり着けるにちがいないという錯覚です
しかし、どんなに客観的に分析したと思っていてもその史料の位置づけや解釈には必ずや分析者の主観が、必ず、知らず知らずのうちに入り込んでしまっています
そこが大きな落とし穴かもしれません
この点は、きっとニーチェの次の言葉「存在するのは事実だけだ」として、現象のところ

で立ち止まってしまう実証主義に対して、それは違う、まさにこの事実なるものこそ存在しないのであり、存在するのは解釈だけだ」、に凝縮されているのだと思います
　まぎれもなく客観的な事実だと信じていた事象が、実は単なる主観的な解釈に過ぎなかったということです
　歴史研究に携わるものすべてが注意しなければならない点です

　会計の歴史というあまり人が手がけない荒野に分け入って、いつの間にか 40 年近くもの年が流れてさりました
　かつてはほとんど理解できなかった最新のアメリカの会計基準や国際会計基準の動向が歴史というフィルターをとうして鳥瞰すると、ぼんやりとですがその姿が浮かび上がってきたように思えます
　その結果、どうしても納得のいかないいくつかの事象に出くわしました
　現代会計が進もうとしている方向に直感的な危うさを感じたのですが、その思いを伝えるために歴史の視点から何点かの論稿や著作を世に問いかけました
　その総決算が本書です
　一見、無味乾燥な数式数字や数式の羅列に見える会計学ですが、歴史を覗いてみると複式簿記によって刻まれた帳簿の中に商人たちの生きざまが描き出されています改行歴史の神秘と面白さです
　歴史研究の本当の意義は、役に立つかたたないかといった物差しだけでは、きっと測れないのではと思っています
　人が歩いてきた長くて短い歴史の真実の姿を解き明かすところにあるのだと感じます